

---

## 恋愛事情～梓の場合～

笠原綾乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛事情〜梓の場合〜

### 【Nコード】

N5271A

### 【作者名】

笠原綾乃

### 【あらすじ】

もう、恋愛なんてしない　そう決意していた梓が会った一人の転校生、秀樹。少し強引な彼に惹かれていく梓だったが……。

## 1・出会い（前書き）

やや現実離れたお話かもしれませんが、ご意見・ご感想お待ちしています。

## 1・出会い

男の人なんて、みんな同じ。

女の子のことを、自分の都合のいいようにしか思っていない。

そう、考えていたのだけれど……。

「ごめんなさい」

高校に入学してから一年半。何度、このセリフを言ったかわからない。

私の目の前にいる背の高い男の子が、ため息について私を見下ろす。

「どうしても、だめなのかな？」

私は彼の目を見ずにうなずいた。

「……そっか。わかった」

真っ赤な夕焼けの下、踵を返して歩いていく彼の様子をただ、見送るこ

としかできない。

だって、好きでもない人とつきあうなんて、いや、男の人とつきあうなんて、もう金輪際、ごめんだから。

「ちょっと梓、また振ったんだって？」

翌朝、2年B組と書かれた教室のドアをくぐり、隅の席に座った私に、シヨートカットのよく似合う、目の大きな私の親友、大山佐知子がやってきた。

「また、って何よ」

「だってそうじゃないの。西川君を振るなんて」

佐知子はそう言うと、持っていたパックの野菜ジュースをストロ―で飲み干した。

昨日私が振ったのは、生徒会副会長でサッカー部主将の、西川正志君。

かっこよくて優しい彼は、女の子の人気者。

確か、先週行われた学校祭の人気投票で第3位に入っていたはず

だ。

「しょうがないじゃないの。私が好きになれないんだから」

「彼氏が欲しいとは思わないわけ？」

ワンレングスの少女、舘岡香織がやってきて、パンをちぎって口に入れた。

「別に。だいたい、男の人とつきあうのってそんなに楽しい？」

私の席を取り囲んだふたりが、大きくため息をついて顔を見合わせた。

「そりゃ、楽しいばかりじゃないけどさ」

今、つきあっている彼氏と喧嘩中の佐知子が、少々投げやりにつぶやく。

「でも、この人とずっと一緒にいたいな、って思える人の隣にいたら、それだけで幸せだと思わない？」

つい最近、恋を実らせたばかりの香織が、微笑みながら訊いてくる。

そりゃ私だって、そんな人がいなかったわけじゃない。

幼いながらも真剣に思っていた彼がいた。

でも彼は、私をいだけ利用して、自分に都合の悪い女になった途端、

私をあつさり捨てた。それ以来私は悟ったんだ。男はみんな、一緒なんだって。

「こら、チャイムは鳴ってるぞ。席に着け」

担任の古賀先生のひとことで、数箇所に固まっていたグループがちりぢりになり、みんなおとなしく席に着く。

私の通っている高校はこの近くでは有名な進学校で、某有名大学合格率70%をはじきだしているけれど、校風はわりと自由。制服こそあれど、届けさえ出せば私服登校もOK。

そんなにいるさい校則もない。だからこそ、みんなはそんなに羽目を外すことなく、普通に学生生活を送っている。

私　西森梓は、そんな自由な校風への憧れと、中学時代まで住んでいた町を離れたい一心で、倍率1.5倍の難関を突破し、この清風高校に入学した。

「えー、HRを始める前に、転校生を紹介する」

ずれた眼鏡を直しながら、古賀先生は言った。

ドアを開ける音がしたのち、転校生が姿を見せた。

すると教室のあちこちから、感嘆の声があがる。

確かに、いい男だ。目は決して大きくないけれど、整った顔立ち。

髪は少し長めだけど、ヘアワックスでまとめてあるせいか、不潔な感じ

はしない。

「三上秀樹です。よろしくお願いします」

「三上の席は……。お、西森の横が空いてるな」

私の名前が先生から告げられたとき、女子のなかから安堵の声がもれた。

私なら、彼を好きになることはないと思われているのだろう。

実際、男の子とあまり関わりたくない私には、迷惑なんだけど。

「よろしく」

「こちらこそ」



最初に交わした短い会話。このとき私は、彼のことを好きになっ  
てしま  
うなんて思いもよらなかった。

## 1・出会い（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。  
（月1回）

## 2・接近

1時間目の授業が終わった。

案の定、隣の彼の席を、クラスの女の子の大部分が取り囲んだ。

「ねえ、どうして今頃転校してきたの？」

「部活は何やってたの？」

といった当たり前の質問から、

「彼女は？」「好きなタイプは？」

そんな下世話な質問にまで、三上君は丁寧に答えている。

正直、うるさくて本が読めない私は立ち上がり、廊下へと出た。

あの席、静かで気に入っているのに、しばらくはやかましい日が続きそう。

「けっこういい男じゃない？ 彼」

赤く色づき始めた木々の葉をぼんやりと見つめる私の背後から、  
佐知子

が声をかけてくる。

「そうかしら？」

「さっさと淳と別れて、モーションかけちゃおうかな」

「何言ってるのよ。別れる気なんかなくせに」

私がそう言うと、佐知子は口をすばませて黙りこくってしまった。

「だいたい、青山君が浮気した証拠なんてどこにあるのよ？ また佐知子

の考え過ぎじゃないの？」

佐知子の彼氏、青山淳君は陸上部短距離走の期待の星にして、学年成績

は常に上位5本の指に入るほど優秀。もちろん先生方の信頼も厚い。ゆえに、もてる。

だから3ヶ月に一度は浮気したしないで喧嘩をし、そのたびに『別れる』

『別れない』を繰り返しているのだ。

「いいや！ 今度こそは浮気してるの。絶対に別れてやるんだから」  
強く反論する佐知子の目には、涙が浮かんでいる。

（別れたいなら、さっさと別れてしまえばいいのに）

私はいつも思うのだけれど、佐知子は結局、彼の想いの強さに負けてしまう。

なんだかんだ言っても、佐知子も青山君のことが好きなのだ。

今の私にはまったくない感情だ。実際問題、二度と持ちたくはないけれど。

「とにかく、一度話し合ってみなさいよ。ね」

チャイムが鳴ったのを合図にこの話を打ち切り、教室へと入った。

やっと放課後になった。

結局あの後も、三上君に対する女の子たちの質問攻めで私の席の周りは占領されてしまい、休み時間の大半を廊下で過ごしていた。

（やっと座れる）

4階の真ん中にある図書館のドアを開けて、いつも座っている窓際の席に腰を下ろす。

少しずつ陽も短くなってきて、窓の外に見える山の向こうに夕焼けが落ちていく。それを背に本を読むこのときが、私の心が一番安らぐ瞬間だ。

今読んでいるのは、時代小説。

昔も今も、男と女の恋愛事情は変わらない。

『好き』と『嫌い』

この感情に人はみな揺れ動き、一喜一憂する。

何度失敗を繰り返しても、人はまた、恋をする。

……不思議な生き物だ。人間って。

自分もかつては恋をしていたくせに、そんな生意気なことを考えている  
と、珍しく、図書館のドアが開いた。

どこかで見たことのある顔が、きよろきよろと中をのぞいている。  
そして  
私の姿を確認すると、わき目も振らずに歩いてきた。

「三上君」

「西森さん、だったよね。ちょっと頼みたいことがあるんだけど」

「私に？」

三上君はうなずいて、いきなり手を合わせてきた。

「俺に、勉強教えてくれないかな」

「はあ？」

私は思わず声をあげた。数少ない利用者の目が、一斉にこちらを向く。

しかし彼は、そんなことはお構いなしに話し続ける。しかも大きな声で。

「この学校、前に俺がいたところより勉強進んでるんだ。今日1日授業

受けたけど、ちんぷんかんぷんでさ」

「だからって、どうして私なの？」

「どうして、って言われても……。駄目かな？」

「悪いけど、他の人あたってくれない。私、勉強教えるの得意じゃないし」

「そこをなんとか！ お願いします！」

彼がさらに大きな声を出すものだから、他の人たちの非難の目が、私たち  
に集中する。

このままだと、追い出されかねない。

「わかった。わかりましたよ。ただし、少しの間だけよ」

「ありがとう。恩に着るよ」

再度顔の前で手を合わせて拝んでくる彼の姿を、私は半ば呆れな

がら見つ  
めていた。

面倒なことに、ならなきゃいいけどな……。



### 3・過去・初めての恋・

三上君に勉強を教えるようになってから、数日がたった。

今のところ、クラスの人たちからの反応はなく、いたって穏やかに、かつ順

調に勉強は進んでいる。まあ、学校祭が終わり、来週から中間テストが始まる

から、みんなそれどころではないのだろう。

「西森さん」

「何？ わからないところ？」

「いや、そうじゃなくて」

私の目の前に座っている三上君が、持っているシャープペンをノートの上に

置き、真剣な表情で見つめてきた。

「彼氏作らない主義、って本当なのかい？」

ああ、そのことが。

「だれに聞いたの？」

「クラスでもっぱらの評判だよ。西森さんは男の子を振りまくるってね」

確かに。クラス中のみならず、学校中の評判になりつつある。

「作りたくないだけよ」

私は手短に答えた。

「どうして？ そんなに可愛いのもつたいない」

「……は？」

面と向かって言われた私は、思わず彼の顔を凝視した。

実は私、自分の容姿が好きじゃない。どちらかというと細い目に、あま

り高くはない鼻。今流行の化粧なんて全く似合わない顔立ちなのに。

その私が、かわいい？

「冗談よしてよ」

「俺は冗談は嫌いな」

三上君は表情を変えずに、さらりと言つてのける。

「どういった理由で作りたくないかはわからないけどさ、もう少し、男に

目を向けてみてもいいんじゃない？」

「大きなお世話。それより、問題解いたの？」

彼から目をそらし、ノートを指差した。

「はいはい。これでいいですか。先生」

差し出されたノートに目を通すが、内容があまり入ってこない。

時間が経つにつれ、顔が熱くなっていくのがわかる。頬はきつと真っ赤  
になっているに違いない。

でも、目の前の彼は気づくことなく、次の問題に目を通し始めている。

私はそっと、顔色を隠してくれているいつもの夕焼けに感謝した。

家に帰って、ようやく自分の試験勉強を始めたが、全く身に入らない。  
つていうか、告白されたわけでもないのに、なんでこんなに動揺し  
なければならぬんだろう。

「ばかばかしい」

私はひとり、小さくつぶやいた。

別に、三上君にかわいいと言われたからって、嬉しくもなんでもない。

でも、心のどこかで、そつとほくそえんでいる自分がある。

ちょっと待て。

私はもう、恋なんてしないって決めたの。

男なんて、みんな一緒。

自分のためなら、好きでもない女だって、平気で抱けるんだから。

そう。自分の立身出世のためなら……。

『私の生徒の飯島くんだ』

二年前。

まだ私が実家にいた頃、私は地元の進学校を志望校にしていたので、勉強

強を教えてくれる人を紹介して欲しい、と父に話していた。

父が連れてきたのは、生徒の中でもトップクラスの成績を誇っている飯

島昇。そいつが、私の初めての「彼氏」。

『君のことが好きになったんだ。つきあってほしい』

そう言われたのが、勉強を教えてもらうようになって、三ヶ月目の秋。

あいつに対する「好き」という感情はなかったけれど、男の人に告白さ

れたのが初めてだった私は、その言葉だけで有頂天になった。

ほとんとなりゆきでつきあい始めたけれど、そうやってしまえばもう、

私は日に日に彼に夢中になった。

背が高くて顔もまあまあ。物腰がやわらかく、常に私を気にかけてくれ

る彼は、私にとって完璧な彼氏。当然、初体験も言われるがまま早々に済ませた。

しかし、恋に夢中になるほど、学校の成績は下がるのが一般的。

私ももちろん、その憂き目に会った。

その頃から、彼の……いや、あいつの態度が徐々に変化してきていたこ

とに、私はまだ気づかずにいる。

#### 4・過去・破綻・

もしあのとき、もっと早く「異変」に気づいていたら、こんなに傷つかずに済んだのだろうか？

『ただいまおかけになった電話は、電波の届かない場所にあるか…』

机の上の明かりだけが光る、薄暗い部屋の中で耳にひびく機械音。

これで何回目だろうか？

（困ったな……。教えて欲しいこと、いっぱいあるのに）

この前返ってきたテストの結果は、散々だった。

もう、受験までわずかしかない。なのに、今まで解けていた問題が、解けない。

勉強時間は変わっていない。いや、昇さんときあうようになってから  
は逆に、彼に迷惑をかけないように増やしているのに、どうしてもこんなに

成績が落ちてしまったのだろうか？

当然、父にも叱られた。

『飯島にならと思ってまかせたのに、一体どうなってるんだ』

彼とつきあっていることを知らない父に、こうなったのは自分の力不足

が原因だと言ってあやまり、どうにか納得してもらった。

これから挽回すればまだ間に合う。そう思って、何度も連絡しているのに、勉強の約束を取り付けることもできないまま、日にちだけが過ぎていく。

「どうして、連絡くれないの。昇さん」

声に出したら、鼻の奥がツンとして、目が熱くなった。

開いたノートに、しずくの落ちる音が、繰り返し聞こえる。

私はそのまま、机に突っ伏して、声を殺して、泣いた。

結局、一睡もできずに夜が明けて、太陽がいつものように顔を出した。

身支度を整え、家を出る。

今日は土曜日。いつもなら、近所の図書館で昇さんと勉強をする日なのに  
彼からの連絡はない。

でも、図書館へ行ったら、昇さんに逢える。

そう思って、顔色が悪いと心配する母を振り切って出てきたけれど、本当に彼は来てくれるのだろうか？

先週末ではなんとも思わなかった右肩の荷物が、やけに重い。

私……、何のために、勉強しようとしてるんだろう？

自分のため？ 父のため？ それとも、昇さんに褒めて欲しいから？

立ち止まり、アスファルトから飛び出している雑草を見つめていた私の耳に、聞き慣れた笑い声が飛び込んできた。

とつさに顔を上げると、そこには、逢いたくて仕方がなかった彼と、もうひとり……。

「昇さん！」

私の声を聞いた彼の目が、見たことのない鋭さを持ってこっちへ向けられ

た。そして、昇さんの肩くらいしかない身長の子の目が、訝し



げに私を  
見つめる。

「どうして、こんなところにいるんだよ」

駆け寄った私に、彼が冷たい声で訊ねてくる。

「どうして……って。今日は土曜日じゃない」

「へえ、この子なの。昇がお守りを頼まれてたお嬢ちゃんって」

耳障りな声が、私たちの会話に割り込んできた。

「やめるよ。加奈」

彼が、ぶっきらぼうに言い捨てる。

「とにかく、今日の勉強会は無しだ。また今度に」

「あなただれ？」

私に向き直った彼の言葉をさえぎり、加奈と呼ばれた女性に訊ねた。

「だれ、って。昇の彼女に決まってるじゃない」

「冗談言わないください。彼女は私です」

「あなたが？」

からかうように私に問うと、彼女はいきなり、甲高い声で笑い出した。

「ほんとに世間知らずのお嬢ちゃんだね。さすが杓子定規な西森教授の娘だわ」

父の名前を、知ってる。

「あのね、一度や二度昇と寝たからって、彼女づらするのはよしてよ。だいたい、なんで彼があんたのお守り引き受けたか知らないの？」

私は思わず、彼女の顔を凝視した。どうしてこの人が、私たちの関係を

知っているの？

「昇はね、成績はいいんだけど、遊び好きだから出席率が悪くてね。それを問いただされて、家の事情でって答えたら西森教授が同情しちゃって。」

俺の娘を高校に合格させてくれたら、出席のことは水に流して単位くれる

って言ったの。昇はそれにのっただけ。わかった？」

「……うそ」

私は昇さんを見上げた。しかし、彼は私を見ようとはしない。

「そついうことだから、頑張って勉強して昇に単位ちょうだいよね。じゃ」

なきゃ、私たち結婚できないんだから」

すれ違いざま、彼女の手が、私の肩に二、三度触れた。そして。

「悪いな。お嬢ちゃん」

今まで見たことのない、下卑た笑みを浮かべて彼が去っていく。

（待って！ 行かないで！）

心の中で叫んで振り返ったとき、ふいに、上半身が冷えた感覚に襲われる。

そのまま視界が大きく揺らぎ、私の意識は、深い闇の中へ堕ちて行った。

## 5・うわさ

（待って！ 行かないで！）

手を伸ばしたとき、耳元で機械音が鳴り、私は目を開けた。

「……夢、か」

また机に突っ伏したまま、眠ってしまっていたらしい。

まさか、あいつの夢を見るなんて。

「最悪」

携帯電話のアラームを止めて、私は吐きすてた。

あのあと、病院に運ばれた私は、極度の疲労と診断された。

3日間入院したのちにしたことは、進路変更の届けを出すことだった。

しかし、地元では何の意味もない。私は願書提出ギリギリのタイミングで

今の高校への受験を決めた。

両親には反対され、父からは勘当まで申し渡されたが、私の決意は変わらなかった。

高校合格後、私は父に長い手紙を書いた。

あいつのことは一切触れずにいたが、この手紙で何を感じ取ったのか、  
後日、勤めていた大学に辞表を提出し、今は別の大学で教鞭を取っているらしい。

今でも私から父に連絡を取ることはない。その代わりと言ってもはなんだ

けど、母が何かと物を送ってくれる。仕送りも母から。

いつか、父と和解できる日が来るのだろうか？

思いにふけていた私を、壁時計のアラームが引き戻す。

見上げると、もう7時。バス時間まで、あと20分しかない。

「いつけない」

私はあわてて、壁にかけてあった制服に手を伸ばした。

今日はあいにくの雨。

傘を差して歩く私の上で、濡れたもみじが風に揺れている。

ふと、私の耳に違う足音が飛び込んできた。

この時間、私のほかにここを歩く人はいないはずなのに。

そう思いながら念のため、後ろを振り返る。すると。

「あれ、西森さん」

「三上くん？」

「偶然だね。君もここ近くなの？」

「それはこっちのセリフよ。いつもは自転車で逆方向に帰るじゃない」

「ああ、あれね……」

並んで歩く三上君が、かすかに言いよどんだ。

「彼女のところにも行ってるの？」

「俺、彼女いないよ」

「もてるのに？」

「もててる？ 俺が？」

三上君が私の顔をのぞきこんでくる。

「な、何でのぞきこんでくるのよ」

頬が熱くなってきた私は、あわてて顔をそらす。そんな私に追い  
うちを

かけるような言葉が、三上君の口から出てきた。

「西森さんに興味あるから」

「……え？」

今度は私が、彼を見上げる番だった。

「興味のない人に、勉強教えてくれなんて言わないよ。俺は」

「冗談、よしてよ」

「だから、冗談は嫌いだって言ってるっしょ？」

真剣な彼の表情に、私は、二の句が告げずに黙り込む。

どうしてこの人は、こんなセリフがさらっと言えてしまうのだろ  
う？

これじゃ、あいつと同じじゃない。

無性に腹が立ってきた私は、早足で前に出た。

「ちょっと」

彼にすぐ追いつかれてしまうが、私はうつむいたまま歩き続ける。

「何でそんなに警戒するわけ？」

立ち止まった私の肩が、思わず震える。

「過去に、何かあった」

「三上君には、関係ない」

彼の言葉をさえぎり、私は駆け出した。

今度は彼も、追っては来なかった。

「梓」

学校の前のバス停で降りた私に、香織が近づいてきた。

「おはよう香織。どうしたの？ 血相変えて」

「あんた、三上君とつきあってるって本当なの？」

「はあ？」

なんでそんな噂が出るの？

「何言ってるの。違うわよ」

「昨日、前にあんたに振られた先輩の……。なんて言ったっけ」



「森島さん？」

「そう。あの人が、図書室から二人で出てくるのを見た、って。もう大騒

ぎなんだから」

声をひそめる香織の顔を見て、私は大きくため息をついた。

だから、男の子に勉強を教えるなんて嫌だったのよ。

「あのね、彼には勉強を教えてただけ」

それだけ返すと、私はくるつと後ろを向いた。

「ちょっと、どこ行くのよ」

「サボる。今日1日その話題に振り回されるなんてごめんだわ」

ただでさえ朝から機嫌が悪いつて言うのに、「冗談じゃない。

」梓ったら」

私は、香織の声を無視して、反対方向へのバスに乗り込もうとした。

その手を、誰かが引き戻す。

「……三上君」

「逃げてどうするんだよ」

そう言つと彼は、私の手を引いてぐんぐん中に入っていく。

「離してよ!」

私は思わず大声をあげた。周りにいる生徒の視線がこつちに集中する。

「逃げたつて何も変わらないだろ。悪いことしたわけじゃないんだから、

堂々としてりゃいいんだよ」

私の手を引いて歩いていく彼の声には、怒りがこもっている。

私は、彼の後を黙ってついていくしかなかった。

## 6 予兆

ざわめく廊下を歩く三上君が、教室のドアを開けた。とたんに、クラス

の人たちの視線が集中し、教室にどよめきが起きる。

当たり前だ。三上君が、男嫌いで通っている私の手をしっかりと握って  
いるのだから。

教室に入るとすぐに三上君は私の手を離し、自分の席にカバンを置いて

教壇のほうへと歩いていく。

「えっと」

教卓に手を置き、彼が口を開く。

すると教室の中のみならず、廊下のざわめきまでもが消えた。

「俺と西森さんがつきあっている、ってありがたい噂を今さっき聞いたん

ですが、それはまったくのデマなんで、よろしくお願いします」

「でもよ。俺、3年の森島から、お前らがいつも図書室に二人きり  
でいる  
って聞いたぜ」

三上君の言葉に、窓際の男子が声を上げる。

「それは、俺が勉強を教えてもらってるだけ。ここの学校思ったより勉強  
が進んでたからさ、拝み倒してOKしてもらったの。第一、図書室  
なんかで  
ラブシーンできるわけがないじゃん」

いきなり辺りがどっとわいた。

……ここ、笑うところじゃないと思うんだけどな。

「西森さんは、俺のわがままにつきあってくれてるだけ。だから、  
温かく  
見守ってくれるとありがたいんで、そこのところよろしく」

「男らしいな。転校生」

三上君が頭を下げたのと同時に、担任の古賀先生が生徒の波をか  
きわけ  
て入ってきた。

「ガキの頃から親父に言われてたんですよ。男子たるもの、女性  
を守れ  
るような強い人間であれ、って」

「ほお。お前の父さんはずいぶんたくましい人なんだな」

「それのおかげで、海外に単身赴任するはずだった親父に、お袋が  
ついて  
行っちゃったんですよ。『あなたがいないと寂しいわ。耐えられな

い』と

か言つて。おかげでこっちはいい迷惑なんですから」

教室内に、再度大きな笑い声が起こつた。

「夫婦仲がいいのはいいことだぞ、三上。それよりHR始めるぞ。みんな戻れ」

古賀先生のひとことで、みんながそれぞれの場所へと戻っていく。背中を押されて教壇を下りた三上君も、席に着いた。

いつもの静けさが教室に戻つた。だれも、私たちへ視線を送る人はいない。

もしかしたら三上君は、自分の話をする事で、私をかばってくれたのかな。

私は、前を見る三上君を横目で見ながら、ふと思つた。

「今朝はありがとう」

放課後の図書室で、私は正面にいる三上君に頭を下げた。

「気にするなよ。俺の方こそ君に迷惑かけちゃったんだから」

「言われてみれば、そうなのよね」

「ひっでえな」

少しふてくされた彼の顔を見て、私は小さく笑った。

「でもよかった。俺、もう二度と勉強してもらえないかと思ってたよ」

「そんなことないわ。だって、約束だもの」

「約束・・・か」

「どうしたの？」

少し寂しげな表情を浮かべた三上君に、私は訊ねた。

「別に。先生、できました」

「はいはい」

彼が解いた問題に目を通す。

「全部合ってるじゃない。これじゃもう、私が教える必要ないみたいね」

「冗談。けっこう必死よ。俺」

彼の顔がずい、と私に近づいた。少し上目づかいのその表情がおかしく

て、私は思わず吹き出してしまふ。

「俺、お笑い目指してるわけじゃないんだけどなあ。……ちよつと、笑いすぎ」

「ごめん。でも……」

「あ、いたいた」

声を殺して笑い続ける私の前の扉が開き、佐知子が顔をのぞかせた。

「どうしたのよ、佐知子」

「私も一緒に勉強していい？ 香織、今日から彼氏と勉強するって言うって」

さっさと帰っちゃったのよ」

「今日から部活動休みだもんね……って、佐知子は青山君と勉強しないの？」

「淳の話はよしてって言ってるじゃない」

「何？ 喧嘩中？」

少々ふてくされ気味の佐知子に、三上君が訊ねる。

「喧嘩じゃない。別れるの」

「ちゃんと話し合ったの？」

「もういいの、あいつのことは。それより私、今度は三上君みたいな彼氏が欲しいな」

「え？ 俺？」

驚いた三上君が、自分を指差し佐知子のほうを振り返る。

「うん。だって今朝の三上君、めちゃめちゃかつこよかったんだもの。やつぱり、彼女のことを一番に考えてくれる男じゃなきゃいやよね」

「それは佐知子のわがまま。青山君、ちゃんと佐知子のこと考えてると思うけど」

「余計なお世話。それより三上君、ここわかんないんだけどな」

話を一方的に打ち切って、佐知子が三上君の隣に座った。

「あ、これはさ……」

三上君は相変わらず丁寧に質問に答えていく。たまに言う彼の冗談に、

佐知子はすごく嬉しそうに笑い、そのたびに三上君が彼女の口元に人差し指を持っていく。



(……あれ?)

なんだか、おもしろくない。

佐知子が一方的に話を切るのはいつものことで慣れっこだし、別に、二

人が楽しそうにしていようが、私には関係ない。

私も、教科書の例題に目を通した。だけど。

(……駄目だ。集中できない)

「あれ? 梓、どこにいくの?」

「ちょっと息抜き。すぐ戻ってくるから」

私は二人の視線から逃れるように立ち上がり、図書室から出て行った。

## 7・事件

（どうしたんだろう、私）

気持ちのもやもやが、おさまらない。

いったい、何にイライラしているんだろう。

今朝から流された、三上君との噂に？ それとも、さっき見た佐知子と

三上君の仲良さそうな姿に？

どっちにしても、私には関係のないこと。こんなことで気持ちを乱されるなんて、私らしくもない。

「ばかばかしい」

私は小さくつぶやいて、図書室を出てすぐの階段をのぼった。最上階に

上がる手前の踊り場に夕焼けが降り注ぐ。

三上君が転校してきてからの数日間、振り回されっぱなしだ。

図書室で、夕焼けを背に本を読む優しい時間も、男子と極力関わらずに

いることで保ってきた穏やかな気持ちも、彼と関わってから、すべて台無

しになってしまった、そんな気がする。

（こんなことなら、勉強を教えなやよかったな……）

そんなことをぼんやりと考えている私の頭上で、足音がした。

振り返ると、そこにはめがねをかけた、見覚えのある人が立っていた。

「森島さん……」

彼は私の姿を確認するや、意味ありげな笑みを浮かべて階段を下りて来

た。その笑顔に力チンときた私は、すれ違いざまに訊ねた。

「どういっつもりなんですか？」

「何がだい？」

「しらばっくれないください。今朝から流している噂のことです」

「ああ、あれか。僕は、事実をありのままに話しているだけだけど」

「何が事実ですか」

思わず声が大きくなる。

「毎日学校内の図書室にいただけで、どうしてつきあっていることになる

んです！？ そんなの、おかしいじゃありませんか」

すぐ下の廊下がざわめき始めた。私の声に驚いた人たちが集まって来た

のだろう。でも、今はそんなことにかまってはられない。

「根も葉もない噂を流されて、私は迷惑してるんです。金輪際、そんなこ

とを言いふらすのはやめてください」

私の抗議に、森島さんは鼻でくすつと笑った。

「何がおかしいんです？」

「ムキになるところを見ると、まんざら嫌でもない、ってことじゃないかな」

私を見下ろす森島さんの表情が、2年近く前に見たあいつに重なる。

思わず私は、目の前にあった森島さんのほほを思い切りひっぱたいた。

「何するんだよ!」

「……痛っ。離してよ!」

ねじり上げられた腕をふりほどこうと動かすが、軟弱そうな風貌とは裏

腹に、思ったよりも力が強い。

そこへ。

「いい加減にしたらどうです? 森島さん」

私の背後から、三上君の声がした。力の抜けた一瞬のすきをついて、私は三上君のそばに駆け寄った。

「ふられた腹いせか何かは知りませんが、ありもしないことをベラベラしゃべって、何が楽しいんですか？　そういうの、男としてみっともないと思うんですけど」

私を背にかばった三上君が、踊り場にいる森島さんに告げる。

「だいたい、俺と彼女がつきあおうがどうしようが、あなたには関係ないんだからほっとしてもらえます？　勉強の邪魔ですから。行こう」

彼は私の肩に手を置くと、下りるように促した。その瞬間。

「梓！　三上君！」

切羽詰まった佐知子の声が聞こえたのと同時に、大きく視界が揺らぐ。

何かに包まれる感覚がしたのもつかの間、私の体はそのまま落下していった。

## 8・邂逅

(ここは……、どこ?)

体に走った痛みが、私の意識を徐々に戻していく。

「……か?」

聞き覚えのある、低い声。

ゆっくりと目を開ける。最初に映ったのは、閉められたカーテンと、白い天井。

そして。

「三上、くん」

私を心配そうにのぞきこむ、三上君のまつすぐな目。

「よかった……。このまま目が覚めなかったら、どうしようかと思っただぜ」

彼は、布団の上にあった私の手を握りしめ、かすれた声とともに、  
安堵

の息を吐いた。

「ありがとう。もう、大丈夫」

そう言って体を起こしたけれど、背中に激しい痛みが走って、そのまま

前に倒れこんでしまう。

「だめだよ、まだ寝てないと」

「ごめん。……三上君？　ちょっと」

私は、自分の体の前に回された彼の腕に視線を落とした。

「まあ、かたいことを言わないで」

「かたいこと、じゃないでしょう。……痛っ」

三上君の腕を振りほどこうとしたけれど、背中の痛みがぶりかえす。

「背中を強く打ってるんだ。あまり動いちゃだめだよ」

彼はそう言って、私を抱きしめる腕に力を込める。力が入らない私は仕方なく、痛みが治まるまで彼に身を預けることにした。

「西森さんはね、頑張りすぎなんだよ」

「え？」

思わず顔を上げると、三上君の目が至近距離で私を見つめている。

また顔が熱くなって来た私は、慌てて視線をそらしうつむいた。

「何でそんなに突っ張ってるかはわからないけど、こうやって、人により

かかるのも、たまにはいいんじゃないか？」

三上君が一定のリズムで優しく、私の頭を叩く。

そのリズムが心地よくて、そつと目を閉じる。

『悪いな。お嬢ちゃん』

三上君の言うとおり、確かに私はあの言葉を聞いて以来、ずっと神経をとがらせていた。

大学教授の娘で、世間知らず。男にだまされたというレッテルを張られるのがたまらなく嫌で、地元を飛び出した。

ここへ来てからも人間と深く関わろうとはしなかった。友達になつた佐

知子や香織にさえも、相談事なんかしたことがない。

でも……。

いいのかな。少し、人に頼っても。

必要以上に男の人を警戒しなくても。

三上君の腕の中で、私は、今まで必死に作ってきた自分の中の何が、  
ゆっくりと解けていくのを感じていた。



「あのさ」

三上君の声が、小さな振動となって私に伝わる。

「何？」

目を閉じたまま私は訊ねるが、彼は何も言葉にせず、黙っている。

「どうしたの？」

再度訊いたとき、彼は私をそっと離れた。そして、私の顔をじっと見つめる。

私の鼓動が、急に大きくなり始めた。いつになく真剣な表情に、目をそらすことができない。

「俺……」

三上君が言いかけたとき、保健室の向こう側から、複数の人の足音が聞こえてきた。

三上君は私から目をそらして立ち上がり、ベットの周りのカーテンを開けた。蛍光灯の光が、暗がりには慣れていた私の目にまぶしく映る。

勢いよく、扉が開いた。そして。

「三上君、梓は？」

佐知子の心配そうな声が、私の耳に入ってきた。

「今、目を覚ましたところ。背中痛いみたいだけど、大丈夫そうだよ」

「よかった。梓」

今にも泣き出しそうな佐知子の顔が、私を見た。

「もう、何半ベそかいてるのよ」

「だって、あんなに勢いよくおっこちてきたのよ。死んじゃったらどうし

よう、って。そればかり考えてたんだから」

言葉の最後のほうは、涙でこもってる。

「ありがとう。もう、大丈夫だから。泣かないでよ」

私は、ベッドにつつぶして泣き出した佐知子の頭を、優しく叩いた。

「俺ががちり守ってたんだから、大丈夫に決まってるでしょう」

「その割には三上君のほうが、ピンピンしてるようだけど」

「それを言ってくれるなよ……」

気まずそうに視線をそらした三上君を見て、私と佐知子は顔を見合わせ  
て吹き出した。

いつもと変わらない、彼の態度。でも、あのときあなたは、私に  
何を言  
おうとしたの？

三上君の背中を見る私の胸が、かすかに痛んだ。

「梓！」

佐知子に続いて古賀先生とともに保健室に入ってきた母の声が、  
私を現  
実へと引き戻す。

「お母さん」

「階段から落ちたって先生に連絡頂いて、飛んできたんだからね。  
ほら、  
あなた」

母の後ろから入って来た人物を見た私は、目を見張る。

「お父さん……」

父は私と目が合うと、気まずそうにうつむいた。

## 9・再会

「大丈夫か？ 西森」

父と母の前に立つ古賀先生が、心配そうに言った。

「あ、はい。ご迷惑をおかけしました」

先生に頭を下げるが、私の心は、父に釘づけだった。

白髪混じりの頭はボサボサ。トレーナーとパンツ姿の格好は、まるで着

の身着のまま、慌てて出てきたような感じだ。

私の実家にいるころは、いつ自分の生徒が来てもいいように、と髪型を

常にきつちり整え、トレーナーなんて着ていたことなかったのに。

「まあ、あなたが三上君ですか。このたびは、娘が大変お世話になりました……。あなた。あなたったら」

母が、古賀先生の後ろに立ち尽くしている父を、三上君の前に引っ張っていく。

「あなたからも、ちゃんとお礼を言ってくださいな」

母に気おされてか、父が三上君にぎこちなく頭を下げる。

「いえ、こちらこそ、梓さんにはいつもお世話になりました」

さしもの三上君も恐縮しきりだ。

昔は、常に父の陰に隠れているような人だったのに、何も言わない父を

せきたて、遅くまで残ってくれていた佐知子にも丁寧にお礼を言っている。

私が家を出てから、立場がすっかり逆転してしまったみたい。

「まったくあんたは、あまり親を心配させないでちょうだい」

ひと通りお礼を言い終えた母の怒りが、ついにこっちに向いた。

「ごめんなさい」

私は少し肩をすくませて頭を下げる。

「まあお母さん。とにかく軽症で済んだようですし、とりあえず今日のと

ころは、このくらいで」

古賀先生に口を挟まれて、今度は母が恐縮する番だった。

「西森はご両親と一緒に先生が送っていくとして。大山、お前どうする？」

「私の家近いですし、一人で大丈夫ですよ」

「近いつて、家どこ？」

三上君が佐知子に訊ねる。

「学校出て5分くらいのところに商店街あるでしょう？　そこで喫茶店や  
つてるの」

「じゃあ、俺が送っていくよ。その近くに用事あるし」

「本当？　じゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな」

佐知子の顔が、一気に明るくなる。

「そうか。なら頼むな。二人とも気をつけろよ」

「はい。大山さん、行こうか」

「うん。それじゃ梓、お大事にね」

出て行く二人を見送る私の心はまた、モヤモヤしていた。

夕方、佐知子と三上君が仲良さそうにしていた時と、同じ。

いや、あの時よりももっと強く、痛みすらともなつて。

「しかし西森。お前もこれに懲りて、男嫌いは卒業したらどうだ？  
三上

みたいに、頼もしいやつも中にはいるぞ」

彼のことを考えていたときにふいに名前を出され、私の顔がまた熱くなる。

「な、何言ってるんですか、先生」

「お、少し赤くなってるぞ。三上に脈あり、かな」

「バカなこと言わないでください。そんなんじゃないやありません。だいたい先生が、そういうことを言ってもいいんですか？」

心の動揺を押し隠すように、私は早口でまくしたてた。

「もう、梓ったら。すみません先生。口の減らない子でして」

好奇心いっぱい先生の目から逃れるように、母のほうへ視線を向ける。

すると、傍らの父の表情がさらにこわばっていることに気づいた。

一瞬、父が私を見た。

しかし、今度は私の視線から逃げるようにうつむいた。そのとき、私ははつきりと悟った。

（お父さんは、私が家を出た本当の理由を……知っている）

## 10・氷解（前書き）

大変お待たせして申し訳ありませんでした。  
ゆっくりお楽しみ下さい。



## 10・氷解

「ここに住んでるのか」

家に帰り、部屋の明かりをつけたとき、父が小さな声でつぶやいた。

父と二人きりだと、なんだか気まずい。

母は、というと、私たちを送ってくれた古賀先生に頼み込んで、近所のスーパーに買い出しに出かけてしまった。

いつから、あんなに厚かましくなったんだか。

そんなことを考えながら私は、お茶の準備をするためにキッチンへ立つ

た。背中はまだ痛むけれど、明日は体育を休むくらいですみそうだ。

「お前は座ってなさい」

父がいつの間にか隣に立っていて、私は驚く。

「でも」

「いいから。けが人はおとなしくしてなさい」

父は私をキッチンから追いやると、慣れた手つきで準備をし始めた。

「お父さんでもできるんだ」

「お父さんでも、とは何だ。母さんのいないとき、これくらいはしてる」

ぶっきらぼうに父が言い、二人分のお茶を持ってきた。

「ありがとう」

なんだか急に照れくさくなった私は、父が入れてくれたお茶を一気に飲み、  
もうとして、思わずむせてしまった。

「慌てて飲むからだろう。大丈夫か？」

初めて聞く父の優しい言葉に、私の目頭が熱くなる。

小さい頃からいつも、自分の仕事で忙しかった父。一緒に過ごすのは、  
朝の食卓を家族で囲んでいるときだけ。

しかも話題は勉強・成績のことばかり。今のような他愛のない会話なん

て、あの頃の我が家には存在すらなかった。

でも、今の父は違う。

母の言うままいろいろな人に頭を下げ、私を気づかい、優しく背中をな

でている。

変わるのかな？ 私たち。

大学教授の娘であるがゆえに、勉強や成績のことで父を煩わせな  
いよう

に考えて、甘えることすらできなかったあの頃の関係から。

涙をこらえていた私の体を、突然父が抱きしめる。

「……すまなかったな。梓」

父の声が、震えている。

「俺があんな男を紹介したばかりに、お前を傷つけてしまった」  
いきなり核心をついてきた父の言葉に、私は小さく首を振った。

「お父さんのせいじゃないよ。騙された私がバカだっただけ」

「本当に、そう思ってるのか？」

私を離し、父が心配そうに見下ろしてくる。

「当たり前じゃない。お父さんだって、あいつの言葉に騙されてた  
んでしょ？」

父の顔が、一気に青ざめた。

「……どうして、それを」

「彼女、って言ってた人に、みんな聞いたの。彼の嘘にお父さんが同情し

て、私を高校に合格させたら単位をやる、って約束したことも。だから私

お父さんを恨むことなんてできなかった。だって、私と一緒にだもの」

早口で言った私から目をそらし、父は、自らの手で顔を覆った。

その体は、小刻みに震えている。

「梓、すまない。俺はなんてことを……」

「もういいよ、お父さん。これ以上何も言わないで」

床に手をついた父の手をとった私の頬に、涙がこぼれ落ちた。

もう、こらえきれなかった。

「お父さん……」

父にすがりついた私は、堰を切ったように泣きじゃくる。

ずっと抱えてきた寂しさと、哀しみを開放するかのようにな。

父はそんな私を、いつまでも抱きしめてくれていた。

## 11・疑問

「ほら、いつまで寝てるの。起きなさい」

母の声と、カーテンの開く音。そして優しい日差しが、私の意識をまど

ろみの世界から引き戻す。

「今、何時？」

「もう8時半よ」

母の言葉に驚き、私は飛び起きる。すると背中に鋭い痛みが走った。

「まったく、何やってんのよ」

母が、呆れた表情で私を見下ろしているのがわかる。

「起こしてくれないからじゃないの。完全に遅刻だわ」

「あんた学校に行く気だったの？」

「当たり前じゃない。テストが近いのに」

母はますます呆れ顔になった。

「何バカなこと言ってるの。今日は病院行ってから、3人で食事に行くん

だから、早く支度しなさいよ」

私はあ然として母を見上げた。

「人の予定を勝手に決めないでよ」

「うるさいわね。たまには親の言うことを聞きなさい。お父さんだって楽しんでるのよ」

お父さんを引き合いに出されたら、承諾せざるを得ないじゃないの。

……確信犯め。

「そつえば、お父さんは？」

「散歩に出てるわよ」

「散歩？ この辺のことわかるの？ お父さんに」

私の問いに、母はクスツと笑う。

「あんたは知らないだろうけど、お父さん、時々様子を見に来てたのよ」

「……え？」

「何だかんだ言っただって、やっぱり梓のことが心配だったのよ。大事なこと」

人娘なんだもの」

母の言葉を聞いて、急に、くすぐったい気持ちになる。

考えが固くて、頑固で、かなり不器用。でも、一部の学生さんには慕われていたのを思い出した。

「基本的に面倒見がいくせに、照れ屋さんなのよね。お父さんは」

「あらあんた、わかってるじゃないの」

母と顔を見合わせて、私は笑う。

そこへ父が戻ってきた。

「ずいぶん楽しそうだな」

「お父さんの悪口言ってたの。ね、お母さん」

私たちを見る父の顔が、とたんに青ざめる。

「冗談に決まってるじゃないですか、お父さん。さ、ごはんにしましょう」

あからさまにホツとした表情を浮かべた父を見た私の頬もゆるむ。

考えが固くて、頑固で、かなり不器用。そして……単純。

そんな父が好きだ。私は、改めてそう思った。

「あれ？ 梓さん」

病院の待合室で父と2人で座っていた私が、聞き慣れた声に振り返ると

ギターケースを抱えた少女が駆け寄ってきた。

「千佳子ちゃん。久しぶりね」

千佳子ちゃんは佐知子の妹で、音楽の道を志している中学2年生。

佐知子のお父さんが小児科病棟の先生と知り合いだとかで、時々、この病院に慰問をしにやってくると佐知子に聞いたことがある。

「今日はどうしたんですか？」

「昨日学校でちょっとケガしちゃってね。佐知子に聞いてない？」

「それが……」

千佳子ちゃんの表情が、少し曇る。

「どうしたの？」

「お姉ちゃん、昨日家に帰ってこなかったんです」



「帰ってこなかった？」

「どんなに遅くなっても必ず帰ってくるのに、連絡すらなかったから、お

母さんがすごく心配しちゃって……。心当たりありませんか？」

一瞬、いやな予感が頭をよぎる。

昨日、最後に佐知子を見たのは、三上君と一緒に帰っていく姿。

送っていく、と三上君が言ったときに見せた佐知子の嬉しそうな笑顔が、  
頭の中に焼きつく。

もしかしたら……。

「梓さん？」

「え？ あ、ごめんね。昨日は両親と一緒にだったし。わからないな」

「そうですか。すみません。変なこと訊いちゃって」

笑顔を作って会釈をし、帰って行く千佳子ちゃんの後ろ姿を見送る私の  
心に、また、モヤモヤが広がっていく。

三上君と佐知子のことを考えるたび、心の痛みが強くなる。

どうしたんだろう？ 私。

自分の心がわからない。

「どうした？ 梓」

心配そうに父がのぞきこんでくる。

「ううん。何でもないの。気にしないで」

私は父の顔を見ないで答えた。すると。

「お前、本当は三上君のことを好きなんじゃないのか？」

突然の言葉に驚いた私は、思わず父を見上げた。

（私が、三上君を……好き？）

自分の心に問いかける。

いつもなら真っ先に「違う」という答えをはじき出してくれる私の心は

このとき、何の反応も示してはくれなかった。

## 12・自覚

「そんな……」

突然の父の発言に、私はそう答えるのが精いっぱいだった。

（三上君を好きはずないでしょう？ 梓。だって、二度と恋をしないっ  
て決めたんだから）

私は、自分自身に言い聞かせるように心の中でつぶやく。

だけどその言葉は、佐知子と一緒にいる彼を想像するだけで痛み出す心

には届くことなく、虚しく空回りするだけだった。

「もう、自分を解放してやったらどうだ？ 梓」

「え？」

「お前を男嫌いにするきっかけを作った俺が言えた義理じゃないが、今の

自分の気持ちに素直になって、新しい恋を試してみたらどうだ？」

自分の、気持ち……。

父の言葉で真っ先に浮かぶのはやっぱり、三上君の顔。

高校に入学してから今まで、男の子の存在を入れることすら許さ

なかつ

た私の心の深い場所に、彼はすんなりと入ってしまったている。

好きになってしまってるんだ、もう。三上君のことが。

そう自覚した途端、急に自分の心が楽になっていくを感じる。

もちろん、彼が私を好きでいてくれる保証なんてないし、佐知子と

のことも気にかかるけれど、私は2年足らずの間に持ち続けていた重い荷

物を下ろすことができたような、そんな気がした。

「ありがとうお父さん。私、頑張ってみるね」

私の言葉に、心配そうに見つめていた父の顔がほころんだ。

「おはよう、梓。もう大丈夫なの？」

翌朝。バスから降りた私に、早速香織が話しかけてきた。

「おはよう。おかげさまで何とかね」

「昨日の朝、先生に聞いたときはびっくりしたんだから」

「ごめん。まさかあんなことになるなんて思わなくて。……どうし

たの？」

私の顔をじっと見つめている香織に訊ねる。

「ねえ。何かいいことでもあったの？」

「どうして？」

「いつもと違って、何となく吹っ切れたような顔してるから」

「ああ。久しぶりにお父さんといろいろ話したからかな」

「ケガの功名、ってやつ？」

「多分ね」

私がこの高校に入学した事情を知らない香織だけど、今まで話したこと

のない父の話題がずっと出たのを聞いて何かを感じたのだろう。そんななり  
と納得してくれた。

「あれ？ 西森さん。出てきて平気なの？」

背後から三上君の声がした。突然の出来事に、私の頬が熱くなる。

「うん。ありがとう。もう大丈夫」

平静を装って返事をするけれど、心臓の鼓動が大きくなるのがわかる。

「おはよう、三上君。ねえ、どうしたの？ その傷」

「ああ、これ。ちょっとね」

そつと三上君の方を見ると、香織の問いに答える三上君の頬には、いく

つかの傷がある。

「あ、そつだ。西森さん」

「何？」

「悪いんだけど、今日の勉強会、ナシにしてくれるかな？」

「うん。わかった」

内心がっかりしつつ、私は彼にうなづく。

今は少しでも、三上君のそばにいたかったのに。

「ありがとう。明日からまたよろしく」

軽く手を上げて校舎に入っていく後ろ姿を見送る私の背後から、いきな

り香織が顔をのぞかせた。

「あ・ず・さちゃん」

「な、何よ」

普段見せない香織の満面の笑みに、私は少しイヤな予感を覚えて後ずさる。

「三上君のこと、好きになったの？」

突然耳元でささやかれた一言に、私の頬は再度熱くなった。

「凶星……だね」

香織つてば、何でこんなにカンがいいんだろう。

観念した私は、小さくうなずく。

「そつかあ。梓もついに恋する少女になりましたか」

「声が大きいわよ」

「いいじゃない。これで公認カップルの誕生だもの」

「公認、って………。彼が私を好きだとは限らないじゃない」

自分にも言い聞かせるように、香織にクギを刺す。しかし。

「そんなことないわよ。全く、何でこんないい時に佐知子は休んでるのよ」

「佐知子が、休んでる？」

香織がうなずいた。

「そう。昨日は三上君もお休みだったんだけどね」

香織の言葉に、昨日抱いていた不安が私の心を覆う。

昨日休んだ二人。勉強会を断った三上君、そしてまだ、私は佐知子の姿を見ていない。

他人の恋愛事情に一人浮かれている香織をよそに、私の心がまた痛み出す。

そして。

佐知子は今日も、学校には来なかった。



### 13・的中

気がついたら、放課後だった。

ぶっちゃけてしまえば、1日をどうやり過ごしたか、記憶がない。

あんな事件のあとだもの、クラスの人からの質問攻めにもあったような

気がするけど、はっきりとは覚えていない。

ただ、学校を休んだ佐知子のことばかりで。

いや、違う。

おととい、一緒に帰ったはずの二人に何があったのか心配で、授業中

も上の空だった、ような気がする。

ばかみたい。

これじゃあ、あの人に冷たくされた約2年前と同じじゃないの。

何だかんだ言っても、恋をすれば結局同じ。

たとえ片思いでも、その人のことが気になって仕方がないんだ。

「梓、帰らないの？」

三上君との勉強会がないことを知っている香織が、私に声をかけ

てくる。

「うん。ちょっと、寄るところがあるから」

「何？ 早速告白するの？」

今日は1日、にやけっぱなしの香織がにじり寄ってくる。

「違うわよ。佐知子の家に行くだけ」

佐知子に、確かめたいことがあった。

青山君とは本当に別れるのか。そして、三上君のことをどう思っているのか。

そんなことを私が詮索する義理は全くないのだけれど、はっきりさせて

おかなければ、気がすまない。

「そうね。私も行こうかな？」

「勉強は？」

「大丈夫よ」

香織は携帯電話を取り出した。

「もしもし拓海？ 実は今日、友達の見舞いに行きたいんだけど勉強会、パスしていいかな？」

拓海、というのは彼氏の名前。で、フルネームは中川拓海。

入学式の帰り道にナンパにあって困っていたところを助けられて、  
香織

は彼に一目ぼれ。

彼が入部した柔道部に自分も入って、素人ながらも努力している  
香織に

惹かれた中川君のほうから、告白してくれたらしい。

「よし、と。私も行くからね。佐知子にも報告して、告白の段取り  
つけな  
くちゃ」

「ち、ちよつと、勝手に決めないでよ。私のことよ」

「何言ってるのよ。今まで男嫌いで通してきた梓に、まともな告白  
ができ  
るわけないじゃない。私たちが面倒見ないでどうするのよ」

「ねえ、人の恋路を楽しんでない？ 香織」

「ばれたか」

肩をすくめて舌を出す香織を軽くとつきながらも、少しだけ、私の心は  
軽くなった。

「まあ、梓ちゃんに香織ちゃん。いらっしゃい」

佐知子によく似た面差しの女性が、私たちを招きいれてくれた。

狭い路地にたくさんの店が立ち並ぶ商店街にある、ちょっとおしやれな

喫茶店、ミューズ。

佐知子のご両親が経営するこのお店の2階部分が、佐知子たち家族の住むプライベートルームで、何回か香織と泊まりにきたこともある。

「佐知子さん、部屋にいますか？」

「それがね……」

香織の問いに、お母さんが顔を曇らせた。

「昨日の夜遅くに帰って来たと思ったら、また出て行っちゃったのよ。あ

の子最近、何も言ってくれないから何考えてるかわからなくて。心あたり  
ないかしら？」

確か佐知子は、青山君とつきあっていることは親に話していないはず。

私たちは顔を見合わせて、黙って首を振るしかなかった。

「まったく佐知子ったら、学校休んでどこほつつき歩いてるんだらう。」

ね？ 梓」

「そうね……」

香織とともに乗り込んだ古いバスの中で、半分上の空で返事をする。

幾度となく抱いていた、いいようなない不安が現実のものとなつて、私の心に押し寄せる。

やはり一昨日の晩、三上君と佐知子の間に何かがあつたんだ。

それが何なのかが知りたい。でも、知りたくない。

知ってしまったら、私の想いの行き場がどこにもなくなってしまいそうで。

そんな私の腕を、香織が急に引っ張り上げた。

「もう降りるところだよ。どうしたの？」

訝しげに私の顔を見る香織に、私は小さく首を振った。

こんなこと、香織には言えない。

「佐知子のことまで心配事でもあるわけ？」

私の家に向かって歩く道すがらで、案の定香織が訊ねてきた。

「ねえ。何でそんなに一人で抱え込んだじゃうわけ？ 私、そんなに頼りないかな」

押し黙る私に、香織の声が少し荒くなる。

「そうじゃないよ」

「だったら話してよ。私たち、親友でしょう？」

香織の真剣なまなざしが、あふれてくる涙でばやける。

「……よし、家に帰ったら大暴露大会よ。いいわね」

まなじりの涙をぬぐって、私はうなずく。

そのときだった。

家に向かって歩き出した私たちの目の前に、今、私が一番見たくない光景が、あった。

「三上君。……佐知子」

香織の声に、表情がさつと変わった二人がこつちを見た。

不安に押しつぶされそうな私が今、一番見たくなかったその光景。  
それは。

涙ぐんでいる佐知子の肩を、そつと抱き寄せている三上君の姿だった。

## 14・呪縛

「ちょっと、どういうことなの!？」

何も言えない私に代わって、香織が声を荒げて二人に訊ねる。

「別に、どうだっていいじゃない」

するとすかさず佐知子が反論に出た。

「佐知子、あんたね。青山君がいながら何やってるのよ」

「淳とは別れたんだもの。誰と何をしようが、私の勝手よ!」

青山君と、別れた？

佐知子の言葉が鋭いナイフのように、私の心に突き刺さる。

「あんた、親友を裏切る気なの？」

香織がいきなり本題に入った。

「裏切る、ってどういうことよ。別に、私が三上君を好きになろうが、香

織や梓には関係ないじゃないの!」

私の気持ちを知らない佐知子の言葉が終わると同時に、香織の手が彼女  
の頬に飛んだ。



「何するのよ！」

佐知子も香織の頬を打った。

「おい、いい加減にしろよ！」

香織が再度、佐知子をぶとうとした手は、彼女をかばった三上君の頬を強く打った。

「三上君！」

佐知子の悲痛な声が、私の心を引き裂いた。

そして、三上君の赤く染まった頬を見たとき、私の中で何かが切れた。

「……行こう、香織」

私は、二人の前で呆然と立ち尽くす香織の手を強く引いた。

「梓？」

「もついい。行こう」

「何言ってるのよ。あんた、このままでいいの？」

「いいって言ってるじゃない。この二人がどうつきあおうが、私には関係

ないもの」

私は三上君の顔を見すえて言い切った。

所詮、男なんてみんな同じ。

恋人がいながら、私を抱いたあいつのように、三上君だって、おととい

私を抱きしめた腕で、今日は佐知子の肩を抱いている。

その事実が、今の私にはたまらなくいやだった。

「ちよっと、梓」

私は香織の腕を引いたまま歩き出す。

「ちょ、待ってくれよ。二人とも」

三上君が、私たちの前に立ちふさがった。

「何か、えらく誤解されてるようだけどさ」

「どいて」

私は彼の言葉をさえぎった。

「話くらい、聞いてくれたっていいだろう」

「聞きたくない」

「西森さん」

「お願い！ これ以上……、私の心に入ってこないで」

私は涙を必死にこらえて三上君に言ったあと、香織の手を離して走り出す。

「西森！」

彼の声が追いかけてくるけれど、私はかまわず走り続けた。

これ以上三上君のそばにいれば、彼への想いがあふれてしまつて、今の態勢を保つことができなくなつてしまう。

「待つてよ、梓」

追いかけてきた香織の手が、私を捉えた。

「どうしてあんなこと　！」

私が泣いているのを見てか、香織の言葉が途中で切れた。

そしてそのまま、香織の手がそつと私の頭を抱きしめる。そのぬくもり

で、心の奥で必死につないでいた細い糸が切れた私は、香織にしがみつ

て、大声で泣き出した。

「……そんな事情が、あつたんだ」

家に帰り、ここに来るまでのすべてを打ち明けた私に、香織がつぶやいた。

心が冷え切った私の前には、香織が入れてくれたホットココアが、ゆる

やかな湯気を立てている。

「世の中には、最低な男もいるもんよね。まったく」

香織が心底いやそうに吐き捨ててくれたおかげで、私の気持ちが少しだけ楽になる。

「でも、本当にいいの？　このままで」

三上君のことを訊いてくる彼女に、私はうなずいた。

「振られるにしても何にしても、きっちり気持ちを打ち明けなきゃ後悔すると思うけどな。私は」

昨日の父と似たようなことを言うてくるけれど、私のなかにはもう、そ

んな勇氣はひとかけらも残っていない。

「もう、男の子とのことで傷つきたくないの。忘れるほうが、きつ

と楽だよ」

「まあ、梓がそう言うなら私は何も言わないけど。でもさ」

白のマグカップを手に持った香織が、そこで言葉を切った。

「でも、何よ」

「うん。……あの二人、本当に両思いなのかな？」

「そうなんじゃないの。おとといだって、べったりだったし」

つとめて冷静に、私は言った。

「私はそうは思わないんだよな。だって、佐知子はまだ青山君に未練ある

だろうし、三上君だって」

「彼の話はやめて」

これ以上三上君の話は聞きたくない。

「……ごめん」

香織に気を使わせて申し訳ないとは思うけど、今の私は、たとえ一時的

にでも、彼の存在を心から追い出すことで精いっぱい。

「それじゃ、私そろそろ帰るけど」

香織が立ち上がった。時計を見ると、午後6時を少し過ぎている。私と違って、自宅住まいの香織を、わがままで引き止めるわけにはいかない。

「うん、大丈夫。どうもありがとう。気をつけてね」

私も立ち上がった。そのとき、部屋のチャイムが鳴る。

私は思わず香織を見た。この部屋を知っているのは、今朝帰った両親に  
香織と佐知子の二人だけ。香織はともかく、両親も佐知子も、今来ること  
はありえない。

私の警戒するそぶりを見てとったのか、目で合図した香織が玄関  
先へ向かう。

「はい。どちらさまですか？」

「あ、舘岡さん。西森さん、いるかな？」

（……三上、君）

声の主に気づいた私の体から、力がすっと抜けていった。

## 15・告白（前書き）

物語の前に失礼します。作者の笠原綾乃です。

昨日7月19日付けのアクセスランキングにおいて、2位にランクインさせていただきました。

これもひとえに、興味を持ってくださる方々のおかげだと思っています。

ありがとうございます。

お話もいよいよ終盤、あと2話を残すのみとなりましたが、最後までおつきあいくだされば幸いです。

今後とも、よろしく願いいたしますm（　　）m

## 15・告白

「よく、ここがわかったわね」

香織の声が、玄関へ続くドア越しに聞こえる。

「大山さんに教えてもらったんだ」

三上君の口から出た佐知子の名前に、私の心がまた痛み出す。

「三上君、ちょっといいかな？」

香織の言葉と同時に、玄関のドアが閉まる音がした。

玄関先まで出れば、二人の会話を聞くことはできる。けれど、今の私に

体を支えるために持っているこのドアノブを、まわす勇氣はない。

二人は今、どんな話をしているのか。

時間を刻む針の音だけが、私の頭の中にひびく。

私は部屋の中央まで戻り、冷めたココアを口にした。でも、味はわから  
ない。

三上君は私に、何を言うつもりでここに来たんだろう？

そして佐知子は、どうして彼に私の家の場所を教えたりしたんだ



ろっつ？

考えれば考えるほど、頭の奥が冷えていくのがわかる。

このまま、三上君が帰ってくればいいのに。

「梓」

香織が、部屋に戻ってきた。

「三上君が、どうしてもあなたと話がしたいって」

私は無言のまま首を振る。

「このままじゃ、何も変わらないんだよ。言いたいことがあるならぶちま

けちゃって、後で泣けばいいじゃない。私、とことんつきあうからさ。ね」

香織がそっと、私の肩に手を置く。

「それに彼、梓が出てくるまでずっと待ってるってよ」

香織が少し困った表情で、玄関のほうを見た。

本当は、会いたくない。会ってしまえば、今、必死に忘れようとしてい

る彼への想いが、心からふきだしてしまいそうだ。

でも、少しずつ気温が下がっていく今の時期に、三上君をこのま

またに  
待たせておくわけにはいかないし、香織のこともこれ以上引き止めるわけにはいかない。

私は、意を決して立ち上がった。

「それじゃ、外で待ってるからね」

香織はそう言って、玄関から出て行った。何度も『帰っていい』と言っ

たけれど、彼女は譲らなかった。

入れ替わりで、三上君が玄関へ入ってきた。私の心と体が、一気に硬直する。

「ごめん。無理やり呼び出しちゃって」

私は、彼の顔を見ずに小さく首を振る。

「さっきのことに関しての、言い訳はしないよ。理由はどうあれ、君が見たままがすべてだろうから。でも、これだけは聞いてほしくて来たんだ。

一昨日の夜も言いかけたんだけど、俺が好きなのは……、  
西森さ  
んだけだから」

一昨日からかすかな予感があったけれど、突然の告白に、私は身動きが

とれなくなった。息が苦しい。

今朝までは、一番聞きたかった彼の言葉。  
でも今は、一番聞きたくなかった、言葉。

一度解き放たれた過去の痛手に、再度とらわれてしまった私の選択肢は、  
いつもの言葉しかない。

泣かないように。

いつもと同じように。

この言葉を、伝えるだけ。

「……ごめんなさい」

私は、体中の力をふりしぼって、深く頭を下げた。

泣かないように唇を噛み締めるけど、涙がどんどんあふれてきて、  
私の  
足元に落ちる。

それに気づいたのか、三上君がいきなり、私の体を引き寄せた。

私は逃れようと力を込めるけど、彼はさらにきつく抱きしめてくる。

「俺じゃ、だめなのか？」

私の体が、小さく震えた。

「俺じゃ、君の男嫌いを払拭することはできないのか？」

（だめじゃ、ない……）

心の中で、私はつぶやく。

もうすでに、『男嫌い』じゃなくなっているんだもの。できるなら、こ

のまま彼の心の中に飛び込みたい。

でも。

佐知子の肩を抱いていたときの光景が、私の心から離れていきな

い。  
青山君と別れた佐知子が、三上君のことを想っている以上、再び  
血が流  
れ出した私の心の傷が、かさぶたになってはがれてくれることはな  
いだろう。

好きな人を疑ったまま、つきあっていくたことはない。だから。

私は、三上君の腕の中ではっきりとうなずいた。

「そうか。……わかった」

浅くため息をついたあと、彼は私をそっと離れた。

「今まで、いろいろありがとう。困らせてばっかでごめんな」

彼はそう言うと、私に背を向けてドアの向こうに姿を消した。

『ごめんなさい』

今までは、傷を負っている自分の心を守るためだけに、何も考えずにこの

言葉を使ってきた。

でも今は、好きな人を傷つけてしまった罪悪感と、自分自身を偽った悔

恨が、あまりにも重く、私にのしかかる。

耐え切れずに膝からくず折れた私の頬を、涙がとめどなく伝って、落ちた。

## 16・対決

携帯電話のアラーム音で、私は目を覚ました。

「やだ、ひどい顔」

床の上で寝たせいか痛む体を起こし、テーブルの上にある手鏡をとって  
つぶやいた。

昨日、三上君が帰ったあと、わたしはまた香織の前で泣いた。

香織は私を責めるようなことは何も言わず、ずっとそばにいてくれた。

『こんどはいい恋ができるわよ。きっと』

そう言って何度も励ましてくれた。それがどんなにありがたかったか。

とりあえず顔を洗おうと立ち上がった私の耳に、メールの着信音が聞こ

えた。香織からだ。

『おはよう。昨夜はよく眠れましたか？』

今日は風邪で欠席、と届けておきますので、ゆっくり休んでいいからね。

明日から中間テスト。お互いに頑張ろうぜい!』

「ありがとう。香織」

お礼のメールを返信したあと、私はつぶやく。

いい友達を持ってよかった。私は、心からそう思った。

香織の気づかいで学校へは行かずにすんだものの、私の気分は晴れない。

テスト期間中は、出席番号順で着席するから三上君とは離れるけれど、

問題は、テストのあと。

彼の隣の席にいることに、今の私は耐えられそうにない。現に、テスト

勉強を始めるものの、まったく頭に入るのがその証明だ。

自分から彼をふったくせに、それを後悔している自分がいる。

三上君のことを頭の中から振り払おうと小さくかぶりを振った私の目

から、また、涙がこぼれてくる。

すると突然、玄関のチャイムの音が鳴った。

時計を見ると、まだ12時半。

学校から実家に連絡が行ったかな？　なんて言い訳しよう。

「はい」

かすれた声で返事をして、ドアノブに手をかけた。

すると。

「……佐知子」

ドアを開けた先には、佐知子がこわばった顔をして立っていた。

「どうしたの？　授業は？」

私は、佐知子から目をそらして訊ねた。

「話があるんだけど、上がっていいかな」

「悪いけど、今度にくれ。具合が悪いの」

「逃げる気？」

突然の佐知子の問いに、私は思わず彼女を見る。

「三上君に聞いたわ。梓にふられたって。どうして？」

「佐知子には関係ない」



彼女の声が終わるかどうかのうちに、私は言った。

「答えになってない。ほんとに三上君のこと、好きなんでしょう？  
だっ  
たら」

「だれのせいだと思ってるのよ！」

今度は佐知子の言葉をさえぎって、私は叫んだ。

「青山君がいたくせに、三上君にもふらふらしてた、あんたのせい  
じゃな  
いの！」

「自分の臆病さを棚に上げて、人のせいにしないで！ 男の子とつ  
きあわ  
ないのは私の主義、みたいな顔して、本当は、過去のことについて  
でもと  
らわれてるだけじゃないの」

佐知子の言葉が、私の心を深くえぐった。

「どうして、それを……」

「あの事件の夜、あんたのお母さんに聞いたの。梓が恋をしないの  
は、中  
学のとき、家庭教師をしてた人に、ひどいふられ方をしたことがあ  
るから  
かもしれないって」

そこまで、母は佐知子に話していたんだ。

「三上君は三上君よ。梓をふった男のような、ひどい人なんかじゃない。」

それは、梓が一番知ってるはずでしょう?。」

……そう、知っている。

三上君がいつも、私のことを気にかけてくれていたことを。

噂が出たとき、ユーモラスに事実を告げて収めてくれて。

森島さんに突き落とされたとき、私をかばってくれて。

そして。

私が「男嫌い」であることを知りながら、想いを告げてくれた。

でも、正直に言つと、どうしたらいいのかわからない。

「ああ！　もう、じれったいな。あんたが三上君に告白しないんだっただった

ら、私が彼に告白するわよ。それでもいいの?。」

佐知子の容赦ない言葉に、私の心が凍りつく。

彼のことを好きなくせに、佐知子はどうしてそんなことを言うってくる

のだろう。第一、私はとうに、彼を切り捨てた人間だ。そんな私が

彼に

今さら告白をして、何になるというの？

「どうせ私はもう淳と別れたんだし、梓が三上君に告白する気がないの

なら、私が三上君の彼女になるわ。だれにも文句は言わせない」

佐知子は、私の目をまっすぐ見て宣言した。

「じゃあね」

私に背を向けた佐知子は振り返りもせず、そのまま部屋を出て行った。

ドアの閉まる音が、私の耳に重くひびいたとき、目の前に突然、暗闇

がひろがった。全身に冷や水をかけられたような感覚に捉われた瞬間、

私はそのまま、意識を失ってしまった。

## 17・決意

（ここは、どこ？）

私はいつの間にか、前後左右すべてが闇に包まれた場所に立っていた。

『悪いな。お嬢ちゃん』

2年前、そう言って私の前から去っていった「初めての彼」飯島昇と自

称「彼女」の姿が目の前に浮かんできたかと思うと、いつの間にかそれは、三

上君と佐知子の姿に変わっていた。

『ごめんね。梓。私たち、つきあうことになったから』

三上君に肩を抱かれた佐知子が、私からゆっくりと遠ざかっていく。

追いかけたいのに、足が動かない。

（待って！ 行かないで！）

言葉にしたいのに、声が出せない。

私、まだ何も伝えていない。

一番大切な『好き』という言葉。

三上君に伝えていない。

彼らに向かって差し出した手を、だれかが強く握りしめた感触で目を開

ける。すると、見慣れた天井の前で、髪の毛の長い少女が心配そうに私をのぞきこんでいた。

「……香織？」

「よかった。意識が戻って」

「私……」

頭にもやのかかった状態で、私はつぶやく。

「玄関で倒れてたのよ。いったい、何があったの？」

香織の言葉にハッとした私は起き上がろうとするが、香織に制止される。

「おとなしく寝てなきゃだめじゃない」

「私、行かなきゃいけないところがあるの」

「行く、ってどこへ？」

「三上君のところ」

間髪入れずに答えた私を見る、香織の目が変わる。

「まさか、梓」

「三上君に、私の気持ちを伝えたいの。……後悔したくない」

香織の目をはっきりと見すえて、私は言った。

三上君が、私を今さら受け入れてくれるかはわからない。

でも、何もしないまま終わりたくない。

「どうしていきなり？ それに、テストが終わってからじゃダメなの？」

「今じゃなきゃダメなの。理由は、帰ってきたら話すわ。だから」

「……わかった。その代わり、何があっても連絡ちょうだい」

私の真剣な表情に負けたのか、うなずいた香織がそっと、私の手を握る。

「三上君とうまくいったら帰ってこなくてかまわないから、メールして。」

約束よ」

香織のまっすぐな言葉に、私の頬は熱くなる。

「帰ってくるわよ。必ず」

私が、照れ隠しに肩をすくめて答えると、香織の顔に笑みが浮かんだ。

勢いにまかせて外に出たはいいものの、私は肝心なことを忘れていた。

それは、三上君の家の住所。携帯番号も当然知らない。

この近くに住んでいることはわかっているけど、正確な場所が特定できなければ、訪ねて行きようがない。

行くあてもないまま、自宅の周りを一周した。

空は少しずつ暗くなっていき、空気も冷えてくる。

距離を歩くほど、私の背中を押した勢いも、彼に想いを伝えようという

勇気も、少しずつしぼんでいく。

「どっしり……」

もう一周しようか。それとも、帰ろうか。

逡巡している私の耳に、聞き慣れた笑い声が飛び込んでくる。

後ろを振り返ると、三上君と佐知子が、夢で見たままの姿で歩いてくる

のが見えた。

「……梓」

佐知子も三上君も、驚いた表情でこっちを見ている。

逃げ出したい衝動にかられたけれど、彼らから視線をそらすことで、か  
ろうじてそれを抑える。

今、言わなくちゃ。

私は一生、後悔する。

「どうしたの？　こんなところで」

佐知子が一步前に出た。

「佐知子」

私は、少しこわばっている佐知子の顔をまっすぐ見た。

「私、やっぱりゆずれない。自分の気持ちに嘘はつきたくないの」

佐知子が目を見開いた。



「私は、三上君が好き。……ごめんなさい」

私は謝罪の言葉と一緒に頭を下げた。

「梓」

顔を上げた私の頬が、大きな音とともにいきなり熱くなる。

「言う相手が違うのよ。バカ」

頬を押さえた私に向かって言う佐知子の声が、震えている。

「しょうがないから、三上君は梓にくれてやるわ。でも、餞別代わ  
りには  
とつだけ教えてあげる。私と淳が別れた原因作ったのは、三上君な  
んだか  
ら。彼氏の責任とって、あんたも私の恋人探しに協力するのよ。い  
いわね」

まくしたてるように言うと、佐知子は私たちに背を向けて歩き出  
す。

「……佐知子！」

「のろけ話なんか聞きたくないわよ。じゃあね」

（ごめんね。佐知子。……ありがとう）

曲がり角の向こうへ消えていった佐知子の背中を見送る私の目か

ら、温  
かい涙がこぼれ落ちた。

## 17・決意（後書き）

こんにちは。作者の笠原綾乃です。ここでお詫びと訂正をさせていただきます。

15話の前書きにて「残り2話」と表明していましたが、お話の都合上、次回の18話で最終回と相成りました。

予告と違う状況になったことを、心からお詫びいたします。

次回が本当の最終回です。どうぞよろしくお願いします。

## 18・解放

「西森さん」

佐知子を見送る私の背後から、三上君が声をかけてきた。

とたんに、私の頬が熱くなる。

「俺のこと、好きって本当？」

三上君が私の正面に立って訊いてくるけれど、まともに顔を見ることが

できずに、うなずくだけ。

「もう一度、言ってくれないかな」

突然の申し出に、今度は私の鼓動が早くなる。

「今度は俺だけに、ちゃんと言って欲しいんだ」

そう。私は三上君のいる前で、佐知子に彼への想いをぶちまけてしまっ

ただけで、彼にはまだ、きちんと書いていなかった。

でも……。

いざ、好きな人に告白するとなると、こんなにも胸が苦しくなるものなのか。

私の耳には今、自分の心臓の音しか聞こえてこない。

考えてみたら私は、今まで自分が好きになったひとに、告白したことがなかったんだ。

何も言えずに立ち尽くす私の手を、三上君がそっと握ってきた。

「俺の気持ちは、変わってない。西森さんが好きだよ」

三上君の2回目の告白に、私は小さく息を吐いて顔をあげる。そして。

「私も、三上君が……好きです」

消え入りそうな声でやっと言った私の体を、三上君が引き寄せた。彼のぬくもりに身をまかせる私の目から、なぜか涙がこぼれ落ちる。

「なんで泣くんだよ」

頭を優しくなでる彼の言葉に小さく首を振るけれど、涙は止まらない。

三上君の大きな手が、私の頬にふれた。

涙をぬぐうと、彼の顔がゆっくりと近づいてくる。

私はそのまま、目を閉じた。

三上君との初めての口づけに、私の心と体が熱くなる。

今まで抱えてきたつらい過去も、心の傷を守るためにつけていた頑丈な

鎧も、彼のぬくもりで、ゆっくりと溶けていく。

彼となら、何があっても歩いていける。

どんなことがあっても、彼を信じて、ついて行ける。

互いを好きだという気持ちがある限り、どんな壁も乗り越えていける。  
きつと。

「……さつき、佐知子が言ってたこと、本当なの？」

何度目かのキスのあと、私を再度抱きしめた三上君に思い切って訊ねた。

「うん。俺らが森島さんに突き落とされた日の夜、大山さんを送っていたっ

たときにはちあわせしてさ、大ゲンカしちゃったんだよ。あの二人」

三上君の話によると、普段、佐知子に言われのない浮気のことを

厳しく

追及され、別れる別れないを繰り返していた青山君は、どうやらそれでキレてしまったらしい。

「で、いきなりあいつが大山さんを殴ろうとするからさ、間に入ったらこのざまだよ」

傷跡が残っている頬を指さして、三上君が苦笑いをした。

「で、当然俺に責任があるわけだから、何とかあの二人を元に戻してやりたかったんだけど……。結局ボツってわけ」

「佐知子、大丈夫かな」

「今ごろひとりで泣いてるんじゃないかな。早いとこ、いい男探してやんないと。だれか知らない？」

「私を知るわけじゃない。学校内で知らない人はいないくらいの『男嫌い』だったんだから」

そっか、とつぶやきながら、三上君は大きくため息をつく。

「まあ、俺よりいい男なんてそうそういないだろうけど、探してみるか」

「ずいぶんと自意識過剰なのね」

私を心配させないための冗談だとわかってはいるけれど、あえて突っ込んでみる。

「当たり前っしょ？ なみいる男を蹴散らして、『男嫌い』だった君の彼になっただからさ」

「……バカ」

急に照れくさくなった私は、目の前にある彼の胸に、軽くパンチを当てた。

「いつてえな。何するんだよ」

お返しにとばかりに、三上君が私の頭を小突いた。

そして二人で小さく笑って、また唇を重ねあった。

二度と、恋愛なんてしないと思っていた。

男はみんな同じ。女の子を都合のいいようにしか扱わないと思っていた。



でも、そうじゃないひともある。

三上君のおかげで、当たり前のことにようやく気づいた。

これから先、ふたりの仲がどうなるかはわからないけれど、今は  
ずっと

彼のそばにいたい。

私は今、心からそう思っている。

## 18・解放（後書き）

「恋愛事情」梓の場合」、ようやく完結いたしました。

ここまで書き続けてこられたのは、ご愛読いただいた方はもちろんのこと、興味を持ってアクセスしていただいた方、そして書く場を与えて下さったウメ研究所さまのおかげだと思っています。

本当にありがとうございます。厳しくも温かいご意見、お待ちしております。

次回作は歴史物になる予定ですが、引き続きごひいき頂ければうれしく思います。

それでは、またお会いできる日まで。

ありがとうございます。

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。  
（月1回）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5271a/>

---

恋愛事情～梓の場合～

2010年10月10日19時24分発行